

看護短期大学での日々を振り返って



地域看護学専攻科1期生 佐藤 千佳子

看護短期大学を卒業してから7年。「昭和50年生まれの子がもう勤め始めたの!？」と驚かれた私達も、いつの間にか「中堅保健師」と呼ばれる年代になった。

上越での4年間の生活は、濃密過ぎて一言ではなかなか言い尽くせない。第1期生として入学し、初めて一人暮らしを経験した学生も多かった。先生方は両親のように、友人達は姉妹のように感じられたものだった。高田公園の桜の下で飲んだ初めてのビール、「うるさい！」と近所の方に怒られながらも学生寮のように楽しかったコーポカトレア、学生の多くが貢献した結婚式場「やすね」でのバイト生活、あわやアパートに帰れなくなりそうだった7.11水害、マイナス4℃の中で眉毛を凍らせながら気合いで乗り切ったスキー合宿・・・様々な出来事があった中で特に想い出深いのは、やはり「実習」である。

病院、家庭訪問、特別養護老人ホーム、保育園、市町村役場などの実習地に行き、たくさんの出会いがあり、たくさん泣いて、たくさんの喜びや学びがあった。看護計画づくりと記録三昧で睡眠不足の日々だったが、担当させていただいた患者さんからは「看護者として心に寄り添うことの大切さ」を学び、臨床指導者からは「自分の看護ケアを日々振り返り、本当に適していたかを問いただす厳しい姿勢」を学んだ。また、患者さんやご家族との交流をとおして、人とふれ合う仕事の楽しさも知った。

今年は水害や地震など、これまでに経験していない出来事にも遭遇したが、仕事で悩んだ時や迷った時に、実習で学んだ言葉をふっと思い出すことがある。看護短期大学で学んだことは、私の保健師活動の土台だと感じている。

また、実習メンバーとファミレスで日付が変わるまで記録を書いていたことや、実習帰りにケーキバイキングに行き、翌日は胃薬のお世話になりながら実習に臨んだこと、実習最終日に受け持ち患者さんからコーヒー牛乳をいただき「ちゃんと見張っていてあげるから！」と急がされながらも病院の階段で一気飲みしたことは、今でも忘れられない想い出である。

「新潟県立看護短期大学」の名前がなくなってしまうのは本当に残念に思うが、上越に行く先生方がいて、学生時代の仲間がいて、妙高山を遠くに見据えた変わらない景色があると思うととても心強い。これからも私達の「故郷」としてあり続けてほしいと願う。

今回、上越時代の写真を見ながら寄稿文を書き、久しぶりに上越に遊びに行きたくなった。この機会を与えてくださった紀要委員会の皆様に感謝いたします。

最後に、笑顔がいつも輝いていた千代こず恵さんと、いつもテキパキ格好良かった高野浩美さん、若くして旅立った二人にいつかまた逢えることを願いつつ・・・。